B-2　山元町高瀬笠野地区　　2011 年 12 月 13 日（火）

報告者名	山口　睦	被調査者生年	1956 年（女）
調査者名	山口　睦	被調査者属性	八重垣神社宮司
補助調査者	相澤　拓郎		

八重垣神社と話者家

八重垣神社の由緒は、大同 2 年（807 年）空海と問答したという徳逸大師（とくいつだいし）が創建したといわれている。スサノオノミコトをお祀りしており、話者家で宮司を務めるようになってから 500 年と言われている。

女子神職は、戦後から登場し現在は 2 割ほどを占める。宮司には姉がいるが、國學院大学神道科に進学した。母親が話者家で 30 年間女子神職を務め、父親は婿養子であり宮城県岩沼市にある竹駒神社の青年部にいた。宮司の夫も婿であり、エンジニアをしており、カナダ留学中の息子と高校生の娘がいる。子ども達に関しては、神職になることは精神的なものが大きいので強制はしていない。やりたいならやればいいと思う。

氏子の範囲

八重垣神社の氏子の範囲は、笠野地区、新浜地区である。震災前は 300 世帯ほどいたが、今回の震災で 90 名が亡くなってしまった。無事だった方も、今では仮設住宅などに暮らしており、どこに行ったか把握できていない人もいるという。市は、今回の東日本大震災により、笠野・新浜地区での住宅の新築を禁止することとした。津波は多くの住居を破壊してしまったため、現在ではここに住むことは困難となっている。

八重垣神社の復興プロセス

6 月 17 日に神社庁の協力を得て、御柱立てを行った。綱をはり、県内一早く行った。7 月 10 日に東京都江東区の下谷神社から社を寄付された。下谷神社は大崎八幡の宮司と知り合いであり、阿佐ヶ谷神明宮から譲られた社を寄付してくれた。

八重垣神社は、鳥居の土台などを残して全て津波に流されてしまったが、誰かが瓦を拾って、お賽銭を置いていった。これは、早く何か拝む形を作らなければと思った。不思議なもので、きちんとした賽銭箱があったときには、年に何回か盗難の被害にあい、盗まれない賽銭箱を作ろうか悩んでいたが、誰でも持っていけるようになっていると誰も盗んで行かないという。

車の祈祷の依頼が一番初めにあり、7 月下旬頃に依頼があった。仮設住宅の祈祷をお願いしたいが、同じ棟の人で望まない人もいるかもしれないから、鍵を祈祷してくれという依頼もある。これは、家移りするために行なってもらうという理由からである。9 月以降は、津波にあった元の住居の井戸の祈祷が増えた。「井戸は放っておくとけっこう障りがある」ためだそうだ。

写真１　寄付された仮の社
（2011 年 12 月 12 日撮影）

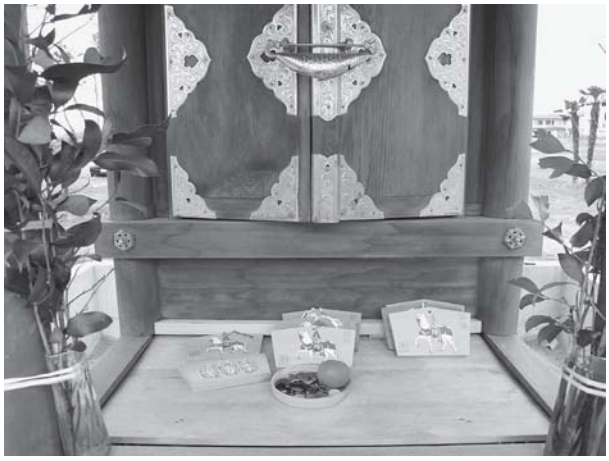

写真２　絵馬とむき出しの賽銭
（2011 年 12 月 12 日撮影）

伊勢神宮から神棚を配るから必要な数を報告するように言われた。150 を申請した。八重垣神社の氏子数は、笠野・新浜で 300 世帯だが、親戚を頼って遠くにいる人などもいるので、170 くらいにおちついた。八重垣神社の氏子以外は、神棚の必要性を感じない人もいるという。ある仮設住宅を廻っていたところ、氏子さん以外の人にも「神棚はいらないか」と尋ねたところ「いらね」といわれ、その場に同席していた八重垣神社の氏子たちが「なしていらねの！」と強い口調で尋ねたそうだ。

これからは、新年の御札（神棚に貼るもの）「御神像」を配るという。徐々に、「御守ない？」「御札ない？」と言われており、そろそろ作らなければいけないと思う。

元境内の脇にあるプレハブは大崎八幡から譲り受けた。トイレも手配してくれるといわれたが、あまりお願いするのも悪いから自分でリースした。運搬は大崎八幡の宮司が趣味で重機などを操る人であり運んでくれた。

横浜大学の先生が神社の杜を復活させようと、育樹祭を行った。

神輿の発見

津波により多くのものが流されたが、海上安全を祈る夏祭り「浜降り神事」で使われてきた神輿も流されてしまった。流されたものの大半は、波の方向が一定ではなかったためにどこに行ったか分からない状態だったという。そんな中で、八重垣神社の元総代の自宅でこの神輿が発見され、見つけた自衛隊の方によって持ち込まれたという。見つかったみこしは兼務神社である天神社に移されることになり、みこしの移動には八重垣神社と天神社の氏子の手で天神社に運ばれた。

7 月 31 日に行った夏祭りには 30 人程が集まり、なんとか神輿を担げないかとも思ったが、流されたために痛んでおり修復が必要であり断念した。昔から神輿の手入れをしてくれていた家具屋さんがあるが、津波で道具を流されてしまい、気力がないとのことで、まだ修復を行えてない。担ぐものなので、途中で折れたりしたら困るので、下手には直せない。

神社の今後について

笠野・新浜地区は住居の新築は禁止されているが、神社は新たに建造することを許されてい

るため、同じ場所での再建を目指す。より安全なところに社殿を構えはしないのかというと、それは考えていないという。その理由については下記のようにいくつかある。

八重垣神社が建立されてから 1,200 年の間に何回も津波にあっただろうと思う。話者は、ここで、安全な山などに逃げたら「かっこわるい」という。スサノオノミコトは海の神様であり、津波被害などを鎮めるために選ばれたのかもしれないので、現在の海の近くから移転する気はない。また、八重垣神社のある笠野地区の南部分は、地域で一番低い土地であり、村を疫病から守るためにここに建立されたのかもしれない。1,000 年間かけて清めてきた場所だから、そこから、障りのある場所に神様をつれていくわけにはいかない。

写真 3　天神社に安置されている神輿
（2011 年 12 月 13 日撮影）

御神体は木の箱に入っていた。宮司になったときに母親に「あなたもみておきなさい」と言われたが、その当時は「私は俗っぽいから（単なる）物にしか見えないかもしれない」と思いみなかった。その御神体も、津波で流されてしまった。神社の片付けに来てくれた若い者に「京都の方にもらいにいってあげようか」などといわれたが、そもそも本当にお祀りしていた神様がスサノオノミコトかも分からないし、御神体は依代だからいらないといった。

また、話者は再び社殿が「流されても、それはそれで構わない」といった。つまり社殿が消失することについて、話者はそれを重要なこととは考えていない。宗教として生き続けることに重要性があるのであって、建物の頑丈さ、建物が残り続けること自体はさほど重要ではないと考えている。今後、地震や津波がおこり社殿が流されたらその年代の人たちが再建すればいい。たとえば、伊勢神宮は 20 年毎に新たに建立するように、神道は生き続ける宗教だから、原点に帰ったと思えばなんでもない。話者は「神道はこれだわと思った」という。神様は、その空間にいて、社などには人間の都合で降りてきてもらう。八重垣神社は全部流されたが、神様はここ（八重垣神社が元々あった場所）にいる。文化財的には神社の建物が「大好きだったから、がっかりしたし、社殿がもったいなかった」という。しかし、「それは形の話だから」という。

八重垣神社には、献膳講という講があった。1 チーム 20 名前後で、40 程ある。亘理や角田市、梁川、原町から 1 月 15 日未明に八重垣神社に来て、暁参りをし、御札を持って帰る。今年はお休みにしようかと思ったが、講中の人と相談したら、一度やめると再開するのが大変だから続けようという話になった。今年は、社務所も流されたので山元町小平の老人憩の家で集まることに決めてある。

震災後、笠野地区・新浜地区に住む氏子の方々は仮設住宅や角田など、神社から離れたところに住むことになった。氏子が減った状態で、八重垣神社はどうなっていくのか。宮司は、このような講もあるし、崇敬神社として存続していく道もあると考えているという。